

平成 18 年度学芸員等在外派遣研修実施報告書

所属館：東京国立博物館

1. 研修テーマ

「博物館教育の評価と改善」

2. 研修期間

平成 18 年 12 月 5 日～平成 19 年 1 月 10 日

3. 研修概要

(1) 研修先の名称

主要研修先：デンバー美術館

(2) 研修の内容

1. デンバー美術館における来館者調査の実施と評価方法の調査、教育普及事業の調査
2. アメリカの博物館における教育普及事業および来館者調査と評価方法についての調査

(3) 研修の成果

デンバー美術館を始めとする教育普及に先進的な事例をもつ博物館において、来館者調査、評価方法および、教育普及事業についての調査、実地研修を行い、研究成果の活用方法について習得した。

1. デンバー美術館について

アメリカにおいて、博物館における教育普及事業は、博物館の歴史と同じ長さを持つといわれる。教育普及事業がさかんなアメリカの中でも、デンバー美術館は、ユニークな面を多数持っている。

デンバー美術館のシニア・エデュケーターであり、AAMの「近年 100 年の功労者」¹⁾に選ばれたパターソン・ウィリアムス氏によると、アメリカの博物館教育は、有意義な質の高い経験を来館者に提供できるように、教育部のみではなく、博物館全体が、移り始めているようである。デンバー美術館は、まさに、その先進的な例である。

美術館で、「来館者の経験」²⁾を重要視していることは、館全体の活動にも影響する。実際にギャラリー内で見られる教育普及活動や展示、教育部の組織、美術館の来館者調査や評価方法にも大きくかかわっている。デンバー美術館での研修では、教育普及活動の調査とともに、どのような来館者調査に基づいた評価方法を行っているかを学んだ。

デンバー美術館ハミルトン館



デンバー美術館北館



A. 教育部の組織について

教育普及部のスタッフは非常勤職員も含めて約 20 人おり、さらに、年間を通してインターンを受け入れている。デンバー美術館独自の組織体系として、エデュケーターもそれぞれ専門分野をもち、「マスター・ティーチャー」として同じ分野のキュレーターと協力体制をとっている。これは、ほかの美術館では見られないもので、この組織編制により、後に述べるような、展示室内での博物館体験を容易にしていると思われる。また、作品の特定分野の担当に加え、ファミリープログラム、成人向けプログラム、学校との連携などの、教育普及の対象別の業務もそれぞれ持っている。



教育部定例会議

¹ AAM Centennial Honor Roll 過去 100 年のうち、アメリカの博物館のそれぞれの分野で先導的な役割をし、公共に貢献した博物館専門職員の表彰。アメリカの博物館全体の方向性、生涯学習、地域の発展に貢献。故人も含む。

² ウィリアムス氏 “Museum Education” から “Visitor Experience” に概念が変化している

分野別の担当をもつことで、ともすれば縦割りになるのを避けるため、週一度水曜日の10時から11時にミーティングを行い、教育部全員で新しいプログラムのブレインストーミングや、連絡報告の時間を作っている。

来館者調査については、マーケティング部門が別途あり、1998年より、外部コンサルタント会社BBCと共に、来館者の満足度を常に調査している。教育普及プログラム、展示、ミュージアムショップやレストランなどの施設、来館者層の調査と、その内容は多岐に渡る。平日、週末、無料観覧日、招待日、夜間開館時など、観客層の違いにわけて調査を行う。季節ごと、年度ごと、4年に1度の報告書を出す。来館者調査および評価は、美術館に対して資金援助をしているところがあるがその成果を調査する場合はほとんどであり、デンバー美術館のように、マーケティングの部署と予算をもち、自分たちで来館者のニーズを探り、美術館の改善のために調査を継続して行っているところは稀だそう³。これは、デンバー美術館の教育部のスタッフによる力が大きく、来館者調査が美術館の改善のために必須であることを美術館に認識させていることによる。来館者調査のシート項目には、「館内での経験の質のレベル (quality of experience)」および「期待していたのに比べてどうか (level of expectation)」の両方が各質問事項あり、分析の際にも有効であるようだ。

そのほか、出版部ではカタログやパンフレットの作成のほかにも、館全体で使う語彙の統一やキャッチフレーズを考案する。セキュリティスタッフが展示品や来館者を物理的に守るだけでなく、心理的にも安心を提供し、また、職場環境の物理的・心理的安全も担当している。館内連絡のために、毎日の館内予定 ”Huddle Note” の館内スタッフ全員へのネット上もしくは印刷での配布、ネット上でのスケジュール管理や忙しい中でのコミュニケーションのとり方など、仕事をしていく上で興味深く、参考になった。

ボランティアは、展示解説をするドーセント、展示室で参加体験を助けたり、来館者を温かく迎えるアンバサダーのほか、インフォメーション、ミュージアムショッ



プでの勤務や、エントランスホールなどの生け花をする人たちがいる。月二回の活動で、曜日別グループにわかれている。1年ごとの更新の契約があり、長い人では40年以上も続けている。デンバー美術館では「デンバー美術館大学」という研修講座があり、すべてのボランティアは、それを受けることになっている。ドーセントは3年かけて養成をするが、その間も実地で、館の概要解説から始め、より専門的な、コレクションの分野別の解説、特別展の解説へとステップアップしていく。ドーセントの解説に対しても評価シートがあるが、それによって受かったり落ちたりする試験形式ではなく、あくまで仲間同士で行う、

³ 来館者調査のコンサルタント ランディ・コーン氏による

改善のためのものである。また、アメリカにおいて、ボランティアに属するのは上流階級が多く、美術館への寄付や上流階級との交流の意味でも美術館側は実行しているようだ。

B. 教育普及の内容

教育普及のプログラムは、ギャラリー内および、ファミリーセンターで行われている。ほかの美術館でもよくみられるように、ファミリーセンターは、ギャラリーとは別の場所にあり、無料で入場ができ、就学前児童が家族と美術館を楽しむことができるスペースである。ここでは、展示作品のうちいくつかのテーマを取り上げて、ゲーム感覚で親しむことができる。日本の展示にあわせた貝合わせ、北米の美術に見られる動物のモチーフと写真をマッチさせるゲーム、さまざまなデザインの椅子をみて自分の椅子を作ったり、エジプトの動物の着ぐるみやマヤの石造の立体パズルなど、解説なしですぐに参加できるようなものがあり、まだ展示をみるには早いような低年齢の子どもたちも、美術に親しむことができる。また、ハミルトン館のユニークな建築を紹介した展示にあわせて、キッズコーナーで、建物に関する数々のアクティビティも用意されている。ファミリーセンターでは、試行を重ねた安全なプログラムが用意されていて、親子で楽しむ姿が見られる。

ファミリーセンター



キッズ・コーナー



それに加えて、美術館のギャラリー内で展示を前に、さまざまな活動が行われていることは、デンバー美術館がほかの美術館とはまったく違う要素である⁴。美術館のギャラリー内での参加体験は、しばしば鑑賞を妨げられるという理由から、遠ざけられることが多い。最低限の情報のみで、あとは作品を直接「見ること」や作品から「感じること」が「鑑賞」とされることも多い。それは、東京国立博物館と同じような東洋美術のコレクションをもつ、フリーア&アーサー・サックラー美術館でも同様であり、現在、展示室内の取り組み

⁴ チルドレンズミュージアム、自然・科学博物館、歴史博物館ではしばしば見られるが、美術館の展示室内での常設のものは稀である。

は、解説文をわかりやすくリライトするにとどまっている⁵。しかし、デンバー美術館では、積極的に展示室内に博物館体験の場が設けられ、それが展示作品に対する理解や興味を深める、鑑賞の一助となっている。

その手法は、工夫をこらした解説パンフレットや種類の違う鑑賞ツール、あらゆるコーナーにありそれぞれ雰囲気や役割の違う図書コーナー、VTR コーナー、感想ノートの設置、ワークショップを設ける方法など、常時展示と併設するものがある。鑑賞ツールもさまざまな年齢層に対応するもの、ハイテク機器からシンプルなものまでを用いている。

たとえば、ギャラリー内に設置してある iPod で、アフリカ美術を見ながらアフリカの音楽、西部の絵画の前で、西部を連想させる音楽や演説を聞いたり、また、オセアニアの展示室で現代のニュージーランドの生活を紹介するスライドショー、画家のインタビューフィルムやタッチスクリーンなど、最新の機器をギャラリー内で使用している。

図書コーナー

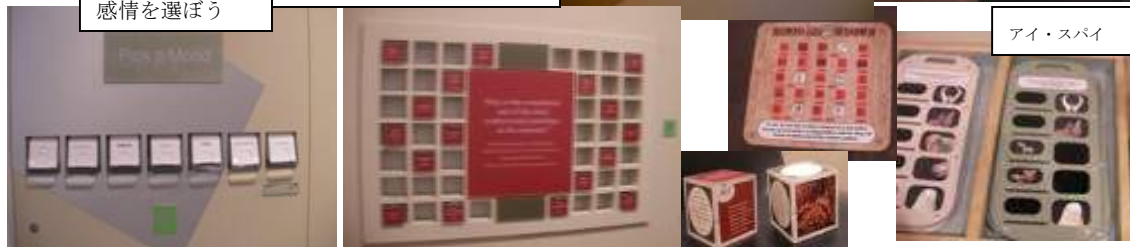


感想ノート：
あなたにとっての美は？



感情を選ぼう

ゲーム形式の鑑賞ツール



アイ・スパイ

その反面、アイ・スパイ⁶やビンゴゲーム、パズル、クイズを使用した解説など、伝統的な手法も使われている。10代後半から20代の若い世代に人気の「感情を選ぼう」という、各展示作品から受ける感情を選ぶカード、小さい子どもたちに人気のアイ・スパイゲームなど、いくつかの選択肢を用意してあることも、美術館の取り組みが広い年齢層に受け入れられている理由である。

ワークショップは、もともとは大人に向けて開発されたものが多いにもかかわらず、自由に気軽に参加できるものが多いことから、やはり子どもに人気ようだ。展示を前にし、

⁵ 新しい教育部長クレア・オロロング氏の就任により、組織上エデュケーターとキュレーターの地位が同等になった。来館者を考えるチームがデザイナー、キュレーターなどとともにできたところ。二館の組織上の制約もあり、展示室内のインタラクティブは困難。

⁶ なぞなぞや、ものの一部の拡大図の中から物を見つけるゲーム。作品をよく見、想像を働かせるのに効果があり、美術館や博物館でもよく使われる手法。

マグネットを使用してベストの模様を再現、展示に関連した絵葉書の作成、アフリカの模様ステンシルやフロッタージュ、アフリカ音楽の再現、オセアニア彫刻の立体パズルなど、「教育」ということよりも、まずは、手を動かし、参加することで、親しみを持たせる役割があるようだ。子どもがいない時間帯は大人が熱中している姿も見られるが、たいていは家族連れが中心である。それは、教育部がプログラム開発時に期待していた、大人の参加するワークショップとは違うため、これからも改良していくとのことだ。



そのほかに、ギャラリー内で土・日に実施しているワークショップ「ホットスポット」⁷が北館に数箇所あり、開館中は予約なしで誰でも参加できる。また、さまざまなテーマに沿った鑑賞ツールが詰まった「バックパック」を個人に貸し出し、ギャラリーに持ちこむこともできる。



また、ギャラリー内には、作品に関連する参加型の展示や参考展示が設けられるなど、展示デザイン全体に関わることもある。それらは、ユニークな組織によるキュレーターとエデュケーター

の連携が強い、デンバー美術館であればこそできることである。

ドーセントによるツアー、アーティストトークなどの講座や、心身障害者のための招待日とそれに合わせた対応、コロラド在住市民のための無料観覧日などもある。

デンバー美術館の教育普及ポリシーは、「来館者の経験」を重要視することである。それは、子どもにはワークショップ、大人にはレクチャーを別室で行っ



⁷ インディアン織物、侍の刀、ミイラの装飾模様、シルバー工芸がテーマのワークショップ、ハンズオン体験など。以前は ArtStop と呼ばれた活動。

たり、プログラムの時だけギャラリー内を使用したりといった従来の教育方法ではなく、子どもにも大人にも美術館内で、それぞれのニーズにあった質の高い経験をてもらい、その人たちにとって、美術館への来館が意味のあるものになることである。

C 調査について

2006年10月にオープンしたハミルトン館において、新しく始まった5つのプログラムの効果を知るため、来館者調査を研修の一部として実施した。画家のインタビューをみるタッチパネル、オセアニアのライドショー、アフリカの模様を使ったステンシルとフロッタージュ、現代美術の解説カード、建築を探すゲームの5箇所である。まず、それぞれの担当のエducatorが何をどういう目的のために知りたがっているのかを確認した。来館者調査は、網羅的に来館者数やバックグラウンドを知るためではなく、何を知り、どんな問題を



解決するか、また、その結果をどう使いたいかによってかわってくることを、この実地研修によって学んだ。担当キュレーターやデザイナーに改善を要求するための資料として、証明するデータを求める場合、来館者がどのような行動をとっているのかをすべて知りたい場合、来館者が教育プログラムに参加しているかどうか、どの段階まで学びが進んでいるのか、来館者がプログラムに気づいているかどうかなどによって、調査方法や項目が変わってくる。その項目を決め、プレテストを行い、再度修正をした上で、各箇所ですら30分4回ずつ、オブザベーションによる来館者調査を実施した。その結果、エドゥケーターが想像していたもの以上に利用されているが、「鑑賞の段階」にはいないもの、存在に気づかないものなどの問題もみつけた。その結果、ツールの置き方や設置場所を変え、サインを出すなどのマイナーチェンジを行うもの、大幅にプログラムを変えるために、さらに深いインタビュー調査などを必要とするものが出てきた。

2. アメリカの美術館・博物館の教育普及について

A. 博物館教育の多様性

デンバー美術館では、特に、展示室内での来館者の経験を重視しているが、教育普及の方法や重視する点は、各館によって異なる。たとえば、サンフランシスコでは、対照的な二館を訪れた。サンフランシスコ・アジア美術館では、ボランティア活動、学校対応、ギャラリー内でのビデオ機器や解説文のほか、展示室ではなく、館の廊下やエントランス、ミュージアムショップ前を利用して、ワークショップやデモンストレーションを行っている。誰もが参加でき、見ることのできる、開放された場所でのワークショップは、活気のある館を思わせる。サンフランシスコ近代美術館 (SFMOMA) では、エデュケーションセンターにおける活動を重視している。そこでは、主に大人を対象としたレクチャーやコンピューター検索、教員への資料提供を行っている。誰でも入ることができるものの、すべてに向けての活動というより、必要な人に対するサービスを充実している感がある。

スミソニアンのアメリカーンインディアン博物館では、現地のコミュニティがキュレーターとして展示に関わる (Native Curator)。展示室でさまざまな参加体験ができ、強いメッセージ性を持った展示を行っていることが興味深い。



サンフランシスコ・アジア美術館
ショップ前のデモンストレーション



SFMOMA の
エデュケーションセンター



アメリカンインディアン美術館 Native Curator

シアトル美術館では、ダウンタウンの本館が現在一時閉館していることから、姉妹館のアジア美術館で本館の収蔵品も展示し、親子が気軽に美術館に入り、こどものためのスペースや展示室内で、リラックスして一緒に展示をみて過ごしている姿がみられた。

フライ美術館では、展示作品を来館者と結びつけたプロジェクトが展覧会となった。通常並べている展示の中から1作品を抜き取り、そこにあった作品がなくなってしまうことへの来館者のさまざまな思いを新たに展示に反映する。「教育」と「展示」の区分けが必要か否かについて、考えさせられた。



シアトル美術館



フライ美術館



デンバーでは、学校との連携を中心に活動し、遠隔地には教育普及のコレクションを派遣するコロラド歴史博物館、ボランティアによる館内ツアーを基本とするモーリーブラウン博物館、体験型を主体としたチルドレンズミュージアムや、その延長の、インタラクティブの展示を中心とした自然科学博物館など、それぞれの特徴をもつ博物館を調査した。

そのような博物館教育活動の多様性からは、どこからが「教育」で、どこからが「展示」や博物館全体なのか、分けけしにくいものもあり、まさに、館全体が教育普及活動であり、来館者の経験をサポートする考えに移行していると感じさせる。

そのほかにも、図書館や空港、史跡などでも、同様に活動は広がっている。



B. 来館者調査および評価について

来館者の博物館における体験を重視し始めているアメリカの博物館において、来館者調査は欠かせないものである。

ほとんどの博物館が行っているものは、カスタマーサティスファクションと呼ばれる、施設を重視した満足度調査、もしくは、教育プログラムや展覧会ごと⁸(フリーア&アーサー・サックラー美術館など)の調査である。それに対し、美術館全体を良くしていくための来館者調査および評価方法については、アメリカでもここ数年の、まだ新しい考えのようだが、着実にその方向に向かっている。施設の充実や混雑状況などの物理的要求や満足度から、博物館内の体験による来館者の心理的なニーズや満足度・理解度へ、また、評価の対象は、展覧会や一つ一つのプログラムから、それぞれの活動が、館全体の理念に沿ったものであるか、また、理念が適切なものであるか、自分たちが将来向かおうとしている方

⁸ アーサー・サックラー美術館「HOKUSAI」展覧会評価など

向に正しく進んでいるかを確認するための⁹ものに変化してきているように思う。また、来館者のニーズを知るだけでなく、美術館が行う必要のあること、または、来館者を導く方向性をもつことも必要であり、長期間の来館者の学びの変化や、そういった来館者調査・評価も必要との考えが、次世代のエducatorに見られる¹⁰。

今回の研修先で受けた印象は、博物館教育の先進国であるアメリカでも、東京国立博物館で感じているような問題点をいまだ持ち続け、改善のための努力を続けていることである。Educatorの地位が確立し、来館者調査の重要性が認められたとはいっても、それは何年もかかって少しずつ組織内と来館者から信頼を勝ち得た結果、徐々に活動を広げていったものである。来館者に目を向け、数値に加え、それだけでは計れない質的評価を来館者調査から証明していった結果による。また、AAMの登録制度などによる、博物館全体の活動の大枠のガイドラインの提供で、各館がそれぞれにあった最善を考え出し、実行していく過程や、館全体の評価にあたって、自己点検をおこなうプロセスの上で成長していき、内部評価や外部評価も、自分たちの目指す方向から選ばれた評価委員による、的を射たアドバイスがみられる。そのことによって、「評価を実施してよかった」¹¹との前向きな感想につながる。

日本においては、評価をクリアするための博物館事業になったり、数値だけの評価方法や的外れの評価結果に不満をもつなどマイナスのイメージがあり、その不十分な評価方法ゆえに教育普及活動や組織の重要性が確立できない悩みはある。「館全体を改善していくための、前向きな評価」に変えてゆくためには、来館者の質的、心理的なニーズを調べる来館者調査および、来館者を館全体で考えることの必要性を、教育普及から館全体に広げていかなければいけない。また、海外や他館とも情報を共有することも大切と思われる。

4. 研究成果の活用計画

1. 評価においては、東京国立博物館における評価方法を検討し、博物館全体を改善していくための、数的だけでなく、質的評価方法を導入するために、検討を重ねていきたい。また、そのために必要な博物館における「来館者の経験」に目を向け、来館者調査をおこなっていきたい。

2. 教育普及活動においては、平成19年4月17日から表慶館に新しくできる教育普及のスペース「みどりのライオン」において、さまざまな来館者に向けた幅広い活動を行い、そこを博物館教育の研究の場として、来館者のニーズや博物館そのものの存在意義について考えていきたい。

また、「みどりのライオン」から始まり、教育普及活動を展示と結びつけ、展示室内でも質の高い「来館者の経験」が行えるような活動を行いたい。

⁹ コロラド大学博物館の評価。

¹⁰ デンバー美術館Educator ヘザー・ニールセン氏

¹¹ コロラド大学博物館の評価に対して、同館コレクションマネージャー蔭山麻理子氏

5. その他

今回の研修では、アメリカの美術館教育や文化さえも変えていったといわれるパターンソン・ウィリアムス氏の下で、他のスタッフとともに、最先端の博物館教育を経験することができた。また、仕事上では来館者調査の技術的なことに加え、長い時間をかけての意識改革、違う職掌のスタッフや、同じエデュケーターと働く上での大切なことなど、心理的な面でも得るものが多くあった。ナショナルセンターとしての東京国立博物館で、教育普及活動を行うにあたり、新たな理念や方法を発信していくために、努力していきたい。

(参考 URL)

デンバー美術館 <http://www.denverartmuseum.org/home>

デンバー美術館こどもページ <http://www.wackykids.org/>

デンバー自然科学博物館 <http://www.dmns.org/main/en>

デンバー動物園 <http://www.denverzoo.org/>

デンバーこども博物館 <http://www.cmdenver.org/>

コロラド歴史博物館 <http://www.coloradohistory.org/>

コロラド大学博物館 <http://cumuseum.colorado.edu/>

サンフランシスコ・アジア美術館 <http://www.asianart.org/>

サンフランシスコ近代美術館 <http://www.sfmoma.org/>

シアトル美術館 <http://www.seattleartmuseum.org/>

フライ美術館 <http://www.fryeart.org/>

スミソニアン博物館群 <http://www.si.edu/> (各スミソニアンの博物館にリンクしています)

フリーア&アーサー・サックラー美術館 <http://www.asia.si.edu/>

アメリカンインディアン博物館 <http://www.nmai.si.edu/>

ランディ・コーン アソシエーション <http://www.randikorn.com/>



デンバー美術館のキャラクター
「シーモア」

6. 東京国立博物館教育講座室の取り組み

さまざまな対象に向けた取り組みのうち、近年力を入れているものに、他分野や他の公共施設との連携事業がある。平成 18 年度には、親と子のギャラリー「博物館の動物園」と「プライスコレクション 若沖と江戸絵画ーあなたならどう見る? ジャパニーズ・アート」にあわせ、上野動物園との連携「いっしょに見よう! 博物館と動物園」¹²を行った。

博物館の展示を前に、動物園の職員が展示作品に見られる動物の種類と生態について語り、博物館職員が、動物園で実際にその動物、虎、ライオン、象、鶴や鷹などを前に、美術作



動物園で解説する博物館研究員

¹²上野動物園の夜間開館「真夏の夜の動物園」にあわせた企画。平成 18 年 8 月 9 日、10 日、14 日、15 日、16:00~16:30「動物園の人によるギャラリートーク」於：東京国立博物館 17:00~17:30「博物館の人によるスポットガイド」於：上野動物園

品での動物の意味について解説した。お互いの固定層に対し、新たな見方を提案したと大変好評であり、他館における博物館と動物園の連携事業¹³のきっかけにもなった。

また、台東区教育委員会、台東区立書道博物館と連携して「明清の書」の展示と解説を行い、二館を移動する際には、台東区の史跡案内をするなど、地域の文化にも興味をもってもらえることができた。

連携企画により、違う視点からの理解が深まったり、違う分野への新たな興味をもつきっかけになるなど、一館だけでは得られない思いがけない効果がある。上野という文化施設や史跡の豊富な地を利用して、効果的な取り組みを考えたい。連携事業を含め、来館者に、より質の高い博物館体験を提供していきたいと思う。

¹³九州国立博物館プライスコレクション『若冲と江戸絵画』の関連企画「きゅーはく動物園」で福岡市動物園・マリンワールドから剥製標本を借用し、飼育員が動物について解説を行う。

7. 東京国立博物館の今後の取組

○「レオナルド・ダ・ヴィンチ—天才の実像」 3月20日(火)～6月17日(日)
ルネサンスの巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチの創造の世界を解き明かす画期的な展覧会。

○足利義満六百年遠忌記念「京都五山 禅の文化」展 7月31日(火)～9月9日(日)
鎌倉時代から室町時代にかけて、五山を中心に興隆した中国風の禅文化。生気みなぎる禅僧の肖像や死の直前に書いた壮絶な墨蹟のほか、雪舟の師、周文作と伝わる水墨画、禅宗寺院独特の仏像など普段は拝観の機会が稀な宝物の数々を展示します。

その他には、本館国宝室において以下を展示いたします。

3月27日(火)～4月22日(日) 国宝 鳥獣人物戯画卷(甲巻) 京都・高山寺蔵

4月24日(火)～6月3日(日) 国宝 白氏詩巻 藤原行成筆

2007年度の詳しい予定は3月下旬発行、東京国立博物館ニュース4・5月号に掲載します。